

CODE10周年記念シンポジウム

寄り添いからつながりへ

報告書



日 時： 2013年2月2日（土）

場 所： 第1・2部 兵庫県公館
第3部 ホテル パレス神戸

主 催： CODE海外災害援助市民センター・兵庫県

この事業は、「公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構」と
「ひょうご安全の日推進県民会議」の助成を受けて実施しました。



CODE10 周年記念シンポジウム

「寄り添いからつながりへ」報告書

目 次

| | |
|---------------------------------------|-------|
| ◆CODE とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. 2 |
| ◆シンポジウム「寄り添いからつながりへ」・・・・・・・・ | p. 3 |
| 開会の言葉 CODE 代表理事 芹田健太郎 | |
| 挨拶 兵庫県副知事 吉本知之 | |
| 1. 基調講演 | p. 5 |
| 「寄り添いからつながりへ 市民による世界の被災地復興支援」 | |
| CODE 代表理事 芹田健太郎 | |
| 2. パネルディスカッション | p. 11 |
| 「支援と受援のあり方」 | |
| コーディネーター CODE 副代表理事 室崎益輝 | |
| プロジェクト報告 CODE 理事・事務局長 村井雅清 | |
| パネリスト | |
| 《アフガニスタン》ルトフ・ラフマン (NGO「SADO」) | |
| 《中国・四川省》彭廷国 (北川県光明村医師) | |
| 《ハイチ》ジャン・クロード・レフェルブ (NGO「GEDDH」) | |
| 閉会の言葉 CODE 副代表理事 水野雄二 | |
| 3. 若者ポスターセッション | p. 39 |
| 「海外災害支援～次世代からの提案」 | |
| ◆世界から東日本へ 国境を越えた「痛みの共有」(東日本訪問記)・・・ | p. 59 |
| ◆資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | p. 67 |
| 1. 神戸宣言 | |
| 2. KOBE の市民による救援活動の歩み (CODE の前身を含む) | |
| 3. 関連の新聞記事 | |
| ◆CODE へのご協力方法／CODE・AID 設立について・・・・・・・・ | p. 83 |

開催当日、兵庫県公館では「1. 17防災未来賞『ぼうさい甲子園』受賞校の取り組み(平成24年度)」および「兵庫県義援金プロジェクト報告」の展示も併せて行いました。

主催 CODE 海外災害援助市民センター・兵庫県

CODEとは？

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で、KOBÉ（阪神・淡路大震災のすべての被災地を指します）は世界70余りの国々から支援を受けました。その後「困ったときはお互い様」の想いから、世界各地の災害を支援しようと市民による救援活動が活発化してきました。

KOBÉの経験と知見を活かし、幅広い智恵や能力をもつ企業、行政、国際機関、研究機関、NGOなどを含めた市民の集まる場として2002年1月17日にNPO法人として発足したのがCODE海外災害援助市民センターです。

CODEは前身となる阪神大震災地元NGO救援連絡会議の時期も含め、これまで51回の救援活動を行ってきました。「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践しています。

長い目で 復興を支援

KOBÉの経験を活かし、市民と協働して、海外の被災地の生活再建・復興を支援します。復興には長い時間がかかります。CODEは中・長期的な視点で被災地に寄り添います。

現地の 内発性を尊重

災害救援においては、被災地の人々が自ら暮らしを立て直すための“内発性を育む”ことが必須です。被災地の人々自身が描き・担う、現地の文化や慣習を反映した復興計画や行動計画づくりを支援します。

CODEのころ

KOBÉから世界へ
学びあい・
支えあいの連鎖を

支援の 届きにくい人へ

痛みの共有を、弱い立場の人が、被災によってより不利な立場に置かれ続けられないよう、子ども、女性、障害者、高齢者、外国人、マイノリティなどがへの支援活動を重視します。

最後の ひとりまで

災害救援は、最後のひとりの人権を回復するまで、直接的に、間接的にかわることが求められます。「被災者」と一括りにするのではなく、多様な一人ひとりを尊重し、たったひとり、最後のひとりの声にも耳を傾けます。

CODEの目指すもの

きずなによる「地球市民力」の向上

国と国とがつながれない場合でも、人と人とはいつでもつながることができます。災害を機に各地との交流が続いているように、それぞれに慣習や文化の違いがあることを認めつつ、自然災害に対する共通言語を見いだし支えあっていく。CODEは、そのきずなが「地球市民力」の向上に、そして世界の平和につながると確信しています。

持続可能で回復力のある社会

防災・減災に取り組むには、地域のコミュニティとくらし、自然環境について考えることが欠かせません。従来の価値観によらない「もうひとつの社会」、つまり地域の自立や自然との共生を目指す持続可能なコミュニティづくりを提案します。これが、事前の備えと災害からの回復力を高めることにつながります。

特定非営利活動法人 CODE海外災害援助市民センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL：078-578-7744 FAX：078-574-0702

E-mail：info@code-jp.org Web：www.code-jp.org



CODE 10周年記念シンポジウム

「寄り添いからつながりへ」

開会の言葉 CODE代表理事 芹田健太郎

今日は、私どもCODEのNPO法人としての10周年、節目の会によくおいでくださいました。私どもは単に10年を振り返るのではなくて、これから先の10年、若い人たちに手渡していく、そういう目的を込めて今回の会を開かせていただきました。

NPO法人として出発するに当たりましては、

現知事からエールを送っていただきました。そして今日、また兵庫県からは吉本副知事に、公務でお忙しいなか、わざわざ来ていただきました。そして、皆さんとともに次の10年を考える機会にしたいと思います。よろしくお願いいたします。

挨拶 兵庫県副知事 吉本知之

CODE海外災害援助市民センターが10周年を迎えるに当たりまして、そして関係者の皆様のご尽力により、このように盛大に記念のシンポジウムが開催されますこと、心からお喜びを申し上げたいと思います。本来ですと知事が参りましてご挨拶申し上げるところでございますが、所用がございまして、代わって私のほうからご挨拶を申し上げたいと存じます。

18年前の阪神・淡路大震災では、県の内外から、発災後1年間かけて138万人ものボランティアの方が駆けつけていただいて、被災地の復興、また、被災者の支援に大きな役割を果たしていただきました。日本ではボランティアというのは根づかないのではないかなと言われておりましたが、この大震災を契機に、災害が発生すると多くのボランティアの方、また、NPOの方々が被災地に駆けつけていただき、まさしくボランティア元年の年であったのではないかと存じます。



そのような中で、このCODEの皆様方は世界各地で発生している災害に対する支援、海外支援の先導的な役割を果たしていただいております。そして、また、その支援の内容は被災者の心に寄り添った支援をやっていただいている。このことに対して本当に心から敬意と感謝を申し上げます。

防災・減災に関する国際貢献をしている、これは大震災を経験した私たちの重要な責務でもあります。その拠点である人と防災未来センターの10周年を機に減災社会の実現に向けた国際

支援のあり方の提言をいただきました。一つは、国際的な支援、受援の仕組みづくりを進めていくこと。二つ目には、子供、女性、高齢者、障害者、外国人など、災害の弱者に対する細やかな配慮を持った国際支援を行っていくこと。三つには、災害が起こる前の予防にも力を入れていく、この三つがあります。この提言を踏まえ、国際防災復興協力機構（IRP）、アジア防災センター（ADRC）など、HAT神戸に集積している機関と連携しながら精力的に国際防災協力活動を展開しております。

世界の自然災害は、1970年代に比べて3倍にも増加をしています。地震だけではなく、風水害の災害も増えてきております。まさに災害の世紀を迎えているというような状況ではないでしょうか。災害のリスクが深まる中、海外の被災地では風土や生活習慣に即した、きめの細かい支援が求められております。被災者に寄り添った支援を実践しておられるCODEの活動、これはたいへん心強い限りであります。今後とも、培ってこられた経験やネットワークを生かして、より一層充実した支援活動の展開をご期待申し上げるところですし、また、県といたしましても、できる限りの支援をしまいたい、このように存じている次第でございます。

最後になりましたが、本日のシンポジウムが有意義なものになりますこと、そしてご参集の皆様のご健勝にての今後のますますのご活躍を祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。皆様とともに国際貢献に頑張ってもらいたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。